

京都大学	博士（地域研究）	氏名	佐久間香子
論文題目	中央ボルネオにおける内陸交易拠点の歴史的形成と変化		
（論文内容の要旨）			
<p>本論文は、マレーシア・サラワク州のトゥトー川最上流域に広がる森林で狩猟採集される林産物の交易拠点であった村落の形成過程と、そこでの社会生活の持続と変化を歴史的視点から描き出す研究であり、著者は2010年から2012年にいたる合計10箇月間のフィールド調査と文献収集から得られたデータにもとづいて論述を展開している。</p> <p>序章では、調査地域をふくむボルネオの人類学的な先行研究を広範に検討し、その大半が個別の民族に焦点をあわせ、その本質をなす文化を明らかにする研究であったことを論じている。そのうえで、多様な民族が混住し、協業してきた調査村（ロング・テラワン村）の状況を適切にとらえるには、それが交易拠点として形成されてきた歴史的経緯をふまえる必要のあることを論じ、本論文の全体的な問題設定をおこなっている。</p> <p>第1章では、ツバメの巣を主な輸出品とする交易がボルネオ内陸部と中国大陸を結ぶ東南アジアの海域世界に広がる交易ネットワークにそっておこなわれていた19世紀から20世紀前半までの時代状況を明らかにしている。そのうえで、内陸河川交易の最上流部に位置する調査村（ロング・テラワン村）には、親族関係で緊密に結ばれた多様な民族が混住し、ロング・テラワン村の後背地をなす広大な森林において市場価値の高い林産物の狩猟採集を分業によっておこなっていたことや、ロング・テラワン村は下流域の村々と縁組をおこなうことで、民族をこえた親族関係の紐帯を形成し、交易品を下流の交易中継地へと安全に移送していたことなどを詳細に記述している。</p> <p>第2章で扱われるのは、第二次世界大戦の終了から1990年代までの状況である。サラワク州の多くの地域では1960年代から開発政策の一環として伐採事業がおこなわれるようになったが、ロング・テラワン村の人々が狩猟採集をおこなっていた広大な森林は1974年にグヌン・ムル国立公園に指定された。その結果、ツバメの巣をはじめ狩猟採集活動の多くが制限され、ロング・テラワン村と州政府との関係は緊張をはらんだものとなっていった。また、ロング・テラワン村の交易拠点としての役割は著しく低下していった。その一方で村人たちは、国立公園の縁辺に分村（ムル集落）をつくり、公園関連の仕事に従事することで現金収入を得るとともに、国立公園の内外で狩猟採集をおこないつづけた。第2章は、このように生業活動が多様化していく過程を、フィールドワークと文献調査から得られた資料を丹念に分析することで精細に描き出している。</p> <p>第3章では、2000年にグヌン・ムル国立公園がユネスコ世界自然遺産に登録された後の状況を扱っている。2002年、公園に隣接するムル空港に50人乗りのジェット機が離着陸できる滑走路が整備された。そのためグヌン・ムル国立公園における観光事業は飛躍的に拡大し、観光事業への就労はムル集落の住民にとって主要な現金収入源となった。他方、ジェット機という高速遠距離移動の手段をえることで、ロング・テラワン村やムル集落からサラワク第2の都市ミリへの移住やミリとの往来が急増していった。その背景には現金収入の増大や都市での教育への関心の高まりなど様々な要因がある。第3章では、これらの多様な要因を析出するとともに、ムル集落の住民が観光事業に従事するだけでなく、国立公園内外での狩猟採集活動を継続しておこなうことで現金収入の増加をはかりつつ、ミリに在住するようになった親族との紐帯をジェット機を利用した狩猟動物の肉の分配などによって緊密に維持している社会生活の複雑な様相を記述している。</p> <p>終章では、第1～4章における記述と分析を要約するとともに、序章で検討した先行研究に立ち返り、本論文の学術的意義についてのべている。その第1点は、東南アジア海域</p>			

世界における交易研究が港市に焦点を合わせてきたが、港市だけでなく港市から輸出される林産物を調達する内陸河川交易にも注目すべきであることや、内陸河川交易が地域社会の形成に大きな役割を果たしていたことを明らかにしたことである。第2点は、村落（ロングハウス）を特定の民族集団に属するものとして把握するのではなく、多様な文化的背景をもつ人々が分業することで交易という生業活動を営んでいたことを具体的資料にもとづいて解明したことである。そして、第3点は、こうした複合的な社会組織の在り方が、後背地の森林が国立公園化されることにもなって生業活動が大きく変化し、ジェット機という高速遠距離移動の手段を利用することで生活圏が急速に拡大した現在においても維持されていることを描き出したことである。